

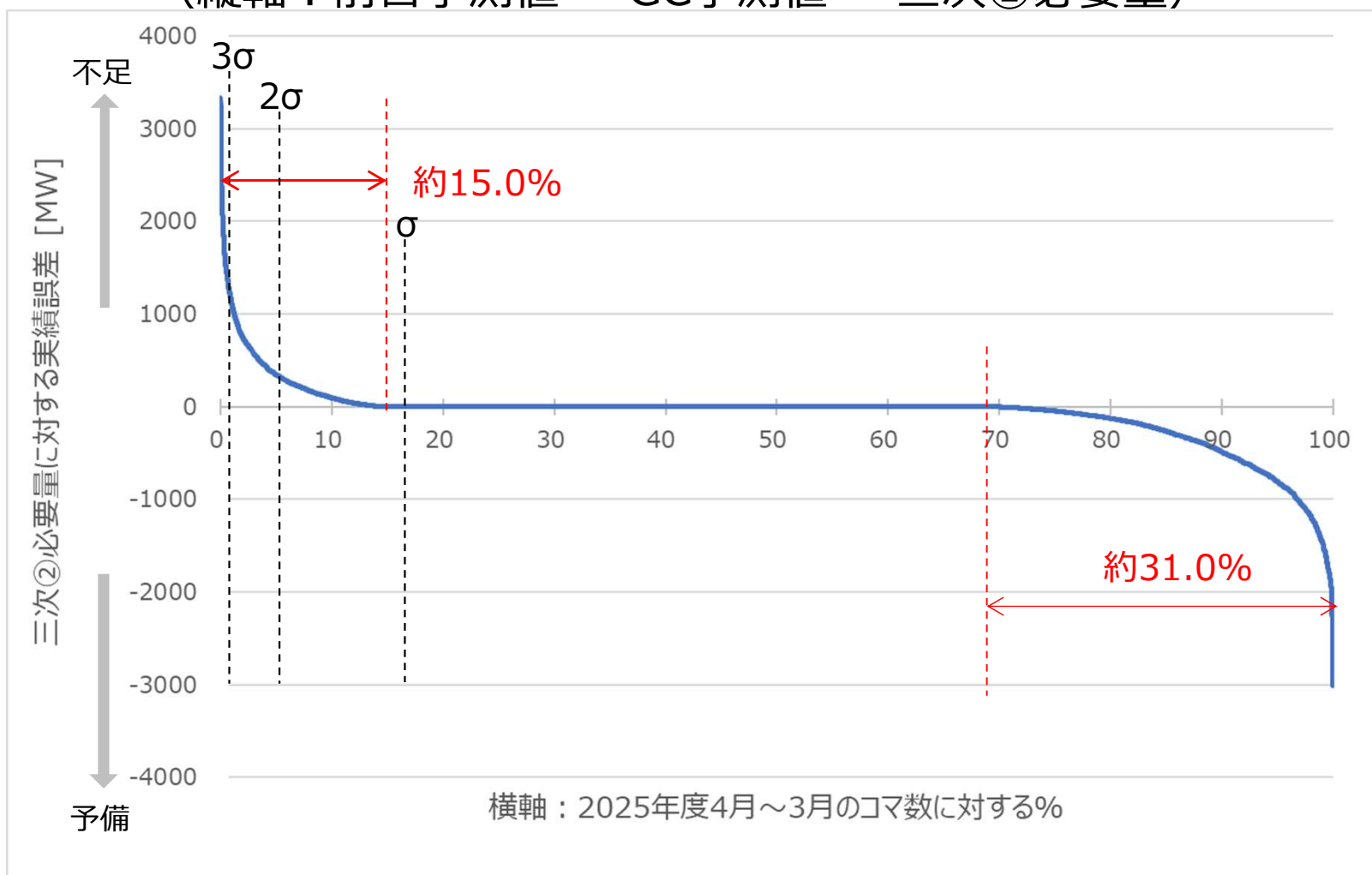
【東京】 2025年度三次調整力②の必要量に係る 事後検証の結果について

2026年6月26日

1-1. 三次②必要量に対する予測誤差

- 2025年度4月～3月において、三次②必要量に対する予測誤差（前日予測値－GC予測値）を確認したところ、約15.0%のコマで不足(三次②必要量 < 予測誤差)、約31.0%のコマで予備(三次②必要量 > 予測誤差)となっていた。

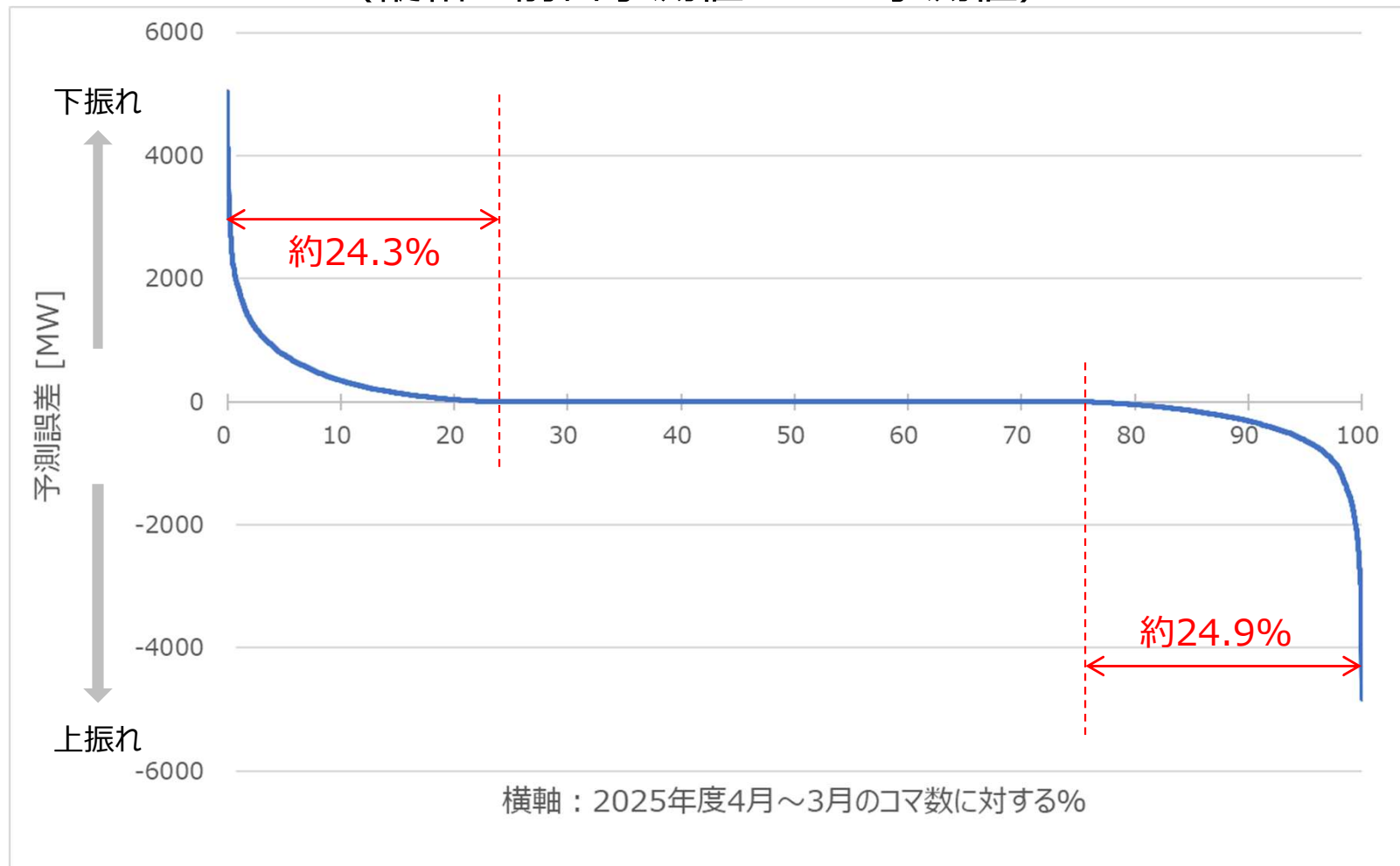
三次②必要量に対する予測誤差のデュレーションカーブ (縦軸：前日予測値 - GC予測値 - 三次②必要量)



【参考】GC予測値に対する前日予測値（予測誤差）

- GC予測値と前日予測値の誤差実績を確認した結果、2025年度4月～3月の下振れと上振れがほぼ同程度発生していることを確認。

GC予測値に対する前日予測値のデュレーションカーブ (縦軸：前日予測値 - GC予測値)

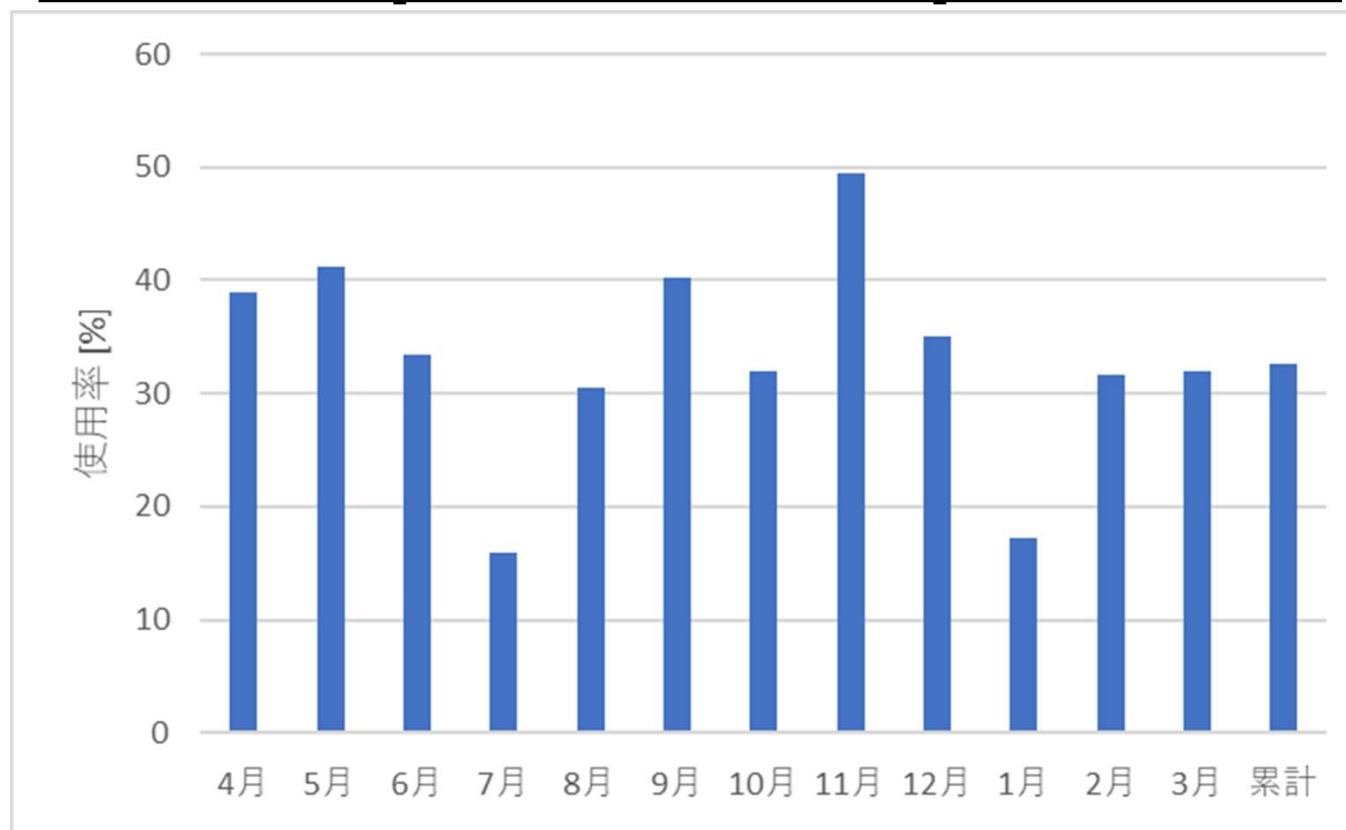


1-2. 三次②必要量の使用率

- 2025年度4月～3月において、三次②必要量が再エネの下振れ誤差に対応した状況（使用率）を確認したところ、約33%となっていた。
- なお、再エネ予測は上振れと下振れが発生するものであり、また安定供給の観点から三次②は大幅な下振れに備えるため確保しているため、すべての三次②を活用する頻度は高くなく、一般的に使用率は高くないものと考えられる。

三次②使用率

(予測誤差実績[前日予測値-GC予測値]÷三次②必要量)



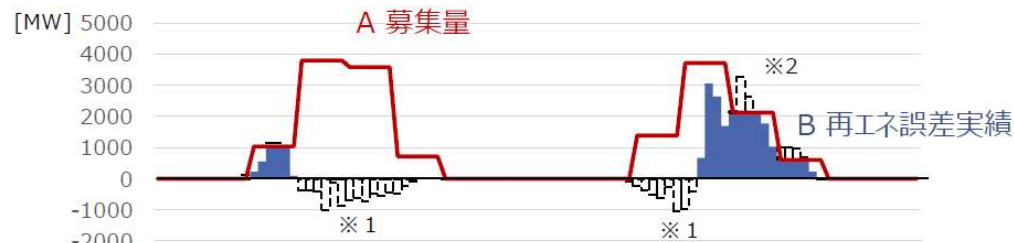
【参考】使用率の算定方法

- 三次②必要量がどの程度下振れ予測誤差に対応するか評価するため、以下の考え方に基づき集計を行った。
 - 再エネ上振れ時には再エネ予測誤差は0と扱う。
 - 必要量を超えて下振れが生じた場合には、予測誤差を必要量と同値にする。

(4)三次②募集量の使用率について

29

- 続いてこれまでの必要量低減に向けた取り組みを踏まえ、三次②募集量に対する経済性評価として、実際の三次②募集量のうち、再エネ予測の下振れ誤差の実績値に対応した使用率を確認した。
- 結果としては、実際の三次②募集量のうち、約22%が再エネ予測誤差に対応していた。
- 昨年度の使用率が全国平均で19%であったことを踏まえると、前述の必要量低減に向けた取り組みにより、使用率が向上したと言える。使用率向上に繋がりうる取り組みは、安定供給上の問題がないことを維持したうえで、継続的に取り組むべきものであることから、一般送配電事業者における取り組みについては、引き続き確認することとしたい。



(2022年4～10月の実績)

	北海道	東北	東京	中部※3	北陸	関西	中国	四国	九州	合計
A 募集量[億kWh]	2.8	20.1	37.9	23.4	1.7	20.6	12.9	10.1	25.7	155.2
B 誤差実績[億kWh]	0.7	4.6	7.7	6.8	0.4	3.9	3.0	2.0	5.2	34.3
C(=B/A) 使用率[%]	26	23	20	29	24	19	23	20	20	22

募集量がどの程度FITの下振れ誤差に対応したかを確認するため、誤差実績について以下のとおり集計

※1 再エネが上振れした場合の誤差は「0」とする ※2 募集量を超過する下振れ誤差は募集量を上限とする

※3 7月15日よりアンサンプル予報を活用した募集量とする

出所) 第35回需給調整市場検討小委員会 (2023.1.24) 資料4

https://www.occto.or.jp/iinkai/chouseiryoku/jukyuchousei/2022/files/jukyushijyo_35_04.pdf

1-3. 気象状況による影響 (1/2)

- 2025年度の三次②必要量が特異的な気象状況によるものか確認した。
- 具体的には、2025年度の必要量テーブルに対して、2024年度※¹実績を用いて算出した“不足コマ数”と“予備となったコマ数”を比較し確認した。

<気象による影響を確認するため用いるデータ>

#	前日予測値・GC予測値	三次②必要量テーブル	補 足
1	2024年度4月～3月※ ¹	2025年度の実取引に用いたテーブル	前年の前日予測値から算定した必要量※ ²
2	2025年度4月～3月	同上	2025年度4月～3月の必要量実績

※ 1 前日予測値およびGC予測値は2025年度設備量の伸び率にて補正

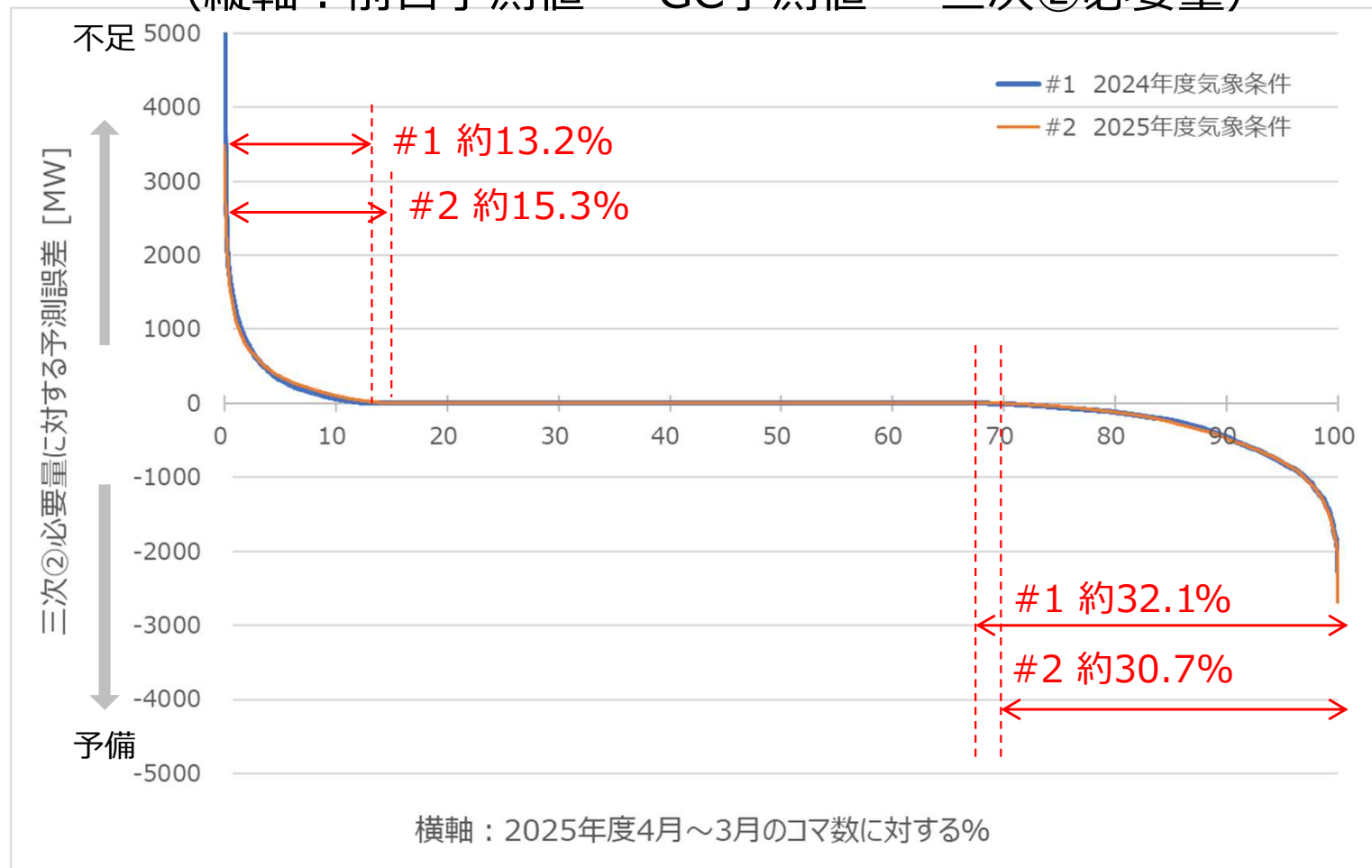
※ 2 2024年度の必要量については取引単位時間 3 時間となっているが、2025年度と条件をそろえるため取引単位30分の必要量とした。



1-4. 気象状況による影響 (2/2)

- 2024年度実績値では、約13.2%のコマが不足、約32.1%のコマが予備であった。
- 2025年度の実績値を用いた結果と比較して多少不足コマが少なく、予備コマが多かったが、有意差といえるほどの差はなかった。

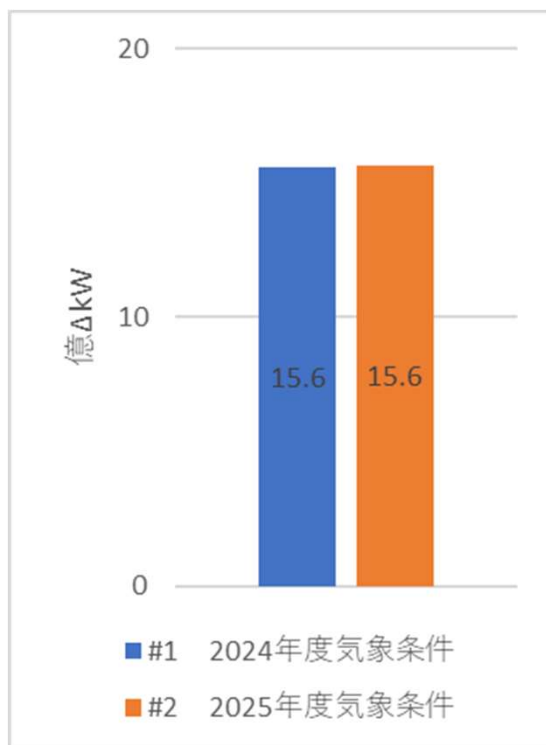
前日予測値・GC予測値の使用年度を変更した場合のデューションカーブ比較 (縦軸：前日予測値 - GC予測値 - 三次②必要量)



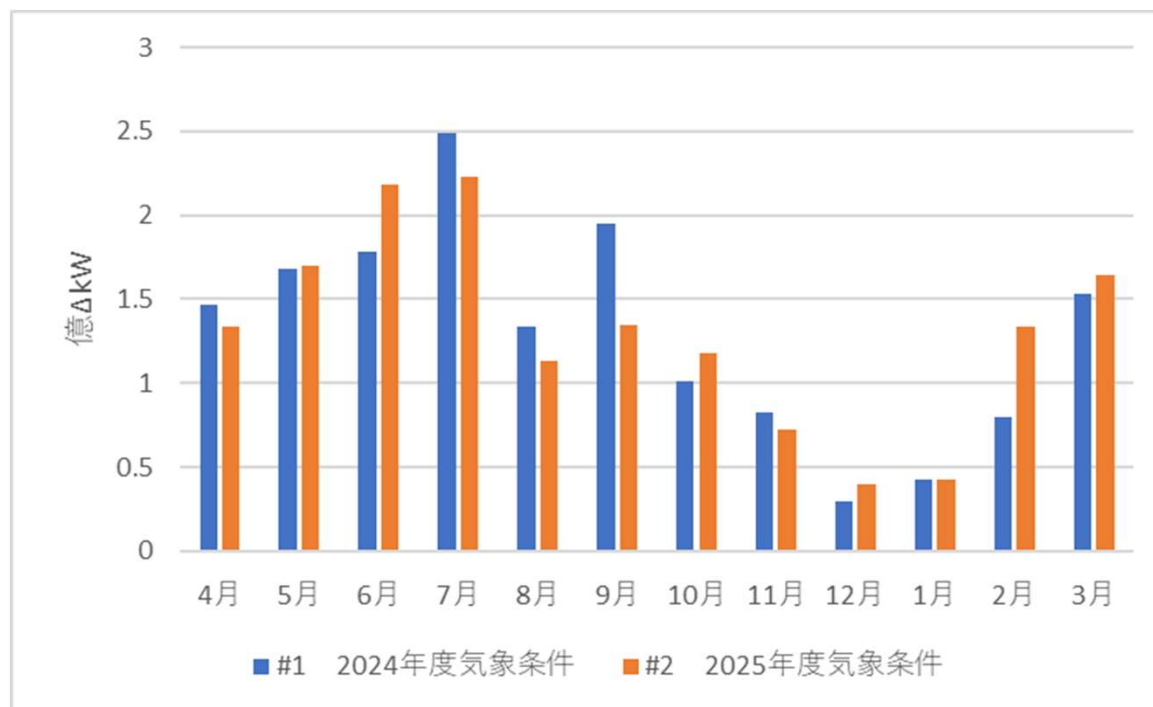
【参考】気象による累計必要量への影響

- 累計必要量においても、気象要因による有意差はなかった。

三次②必要量（累計）



三次②必要量（月別）



1-5. 三次②必要量の前年度との比較

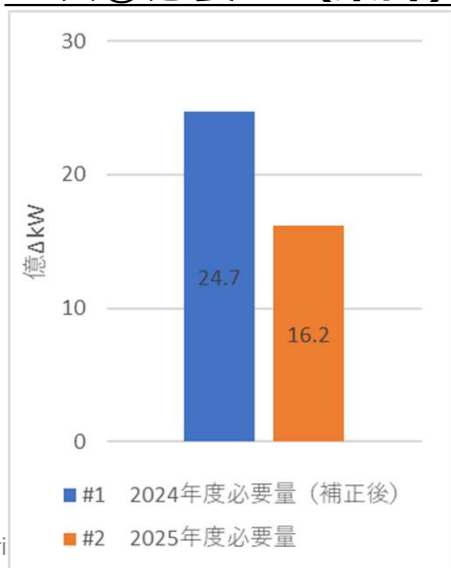
- 2025年度と2024年度の同期間※の必要量との比較評価を行った結果、累計では34%程度減少した。
- これは気象条件や必要量テーブル作成に用いる諸元データの違いに加え、2024年7月より導入された効率的な調達(1σ)および2024年10月より導入された気象モデルの高度化、2025年度10月より導入された1σ信頼度ランクによる効果と考えられる。

※三次②必要量はFIT設備量の変化にも影響を受けることから、2025年度の必要量は2024年度との設備増加率にて補正を実施

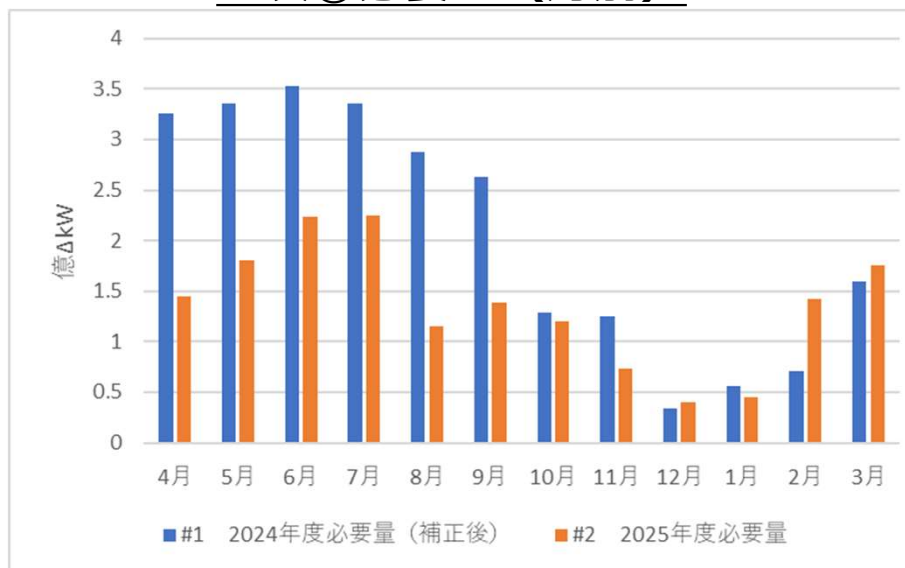
<必要量の諸元>

#	三次②必要量	三次②必要量テーブル	前日予測値
1	2024年度4月～3月の実績を設備増加率で補正	2024年度の実取引に用いたテーブル	2024年度4月～3月
2	2025年度4月～3月の実績	2025年度の実取引に用いたテーブル	2025年度4月～3月

三次②必要量 (累計)



三次②必要量 (月別)

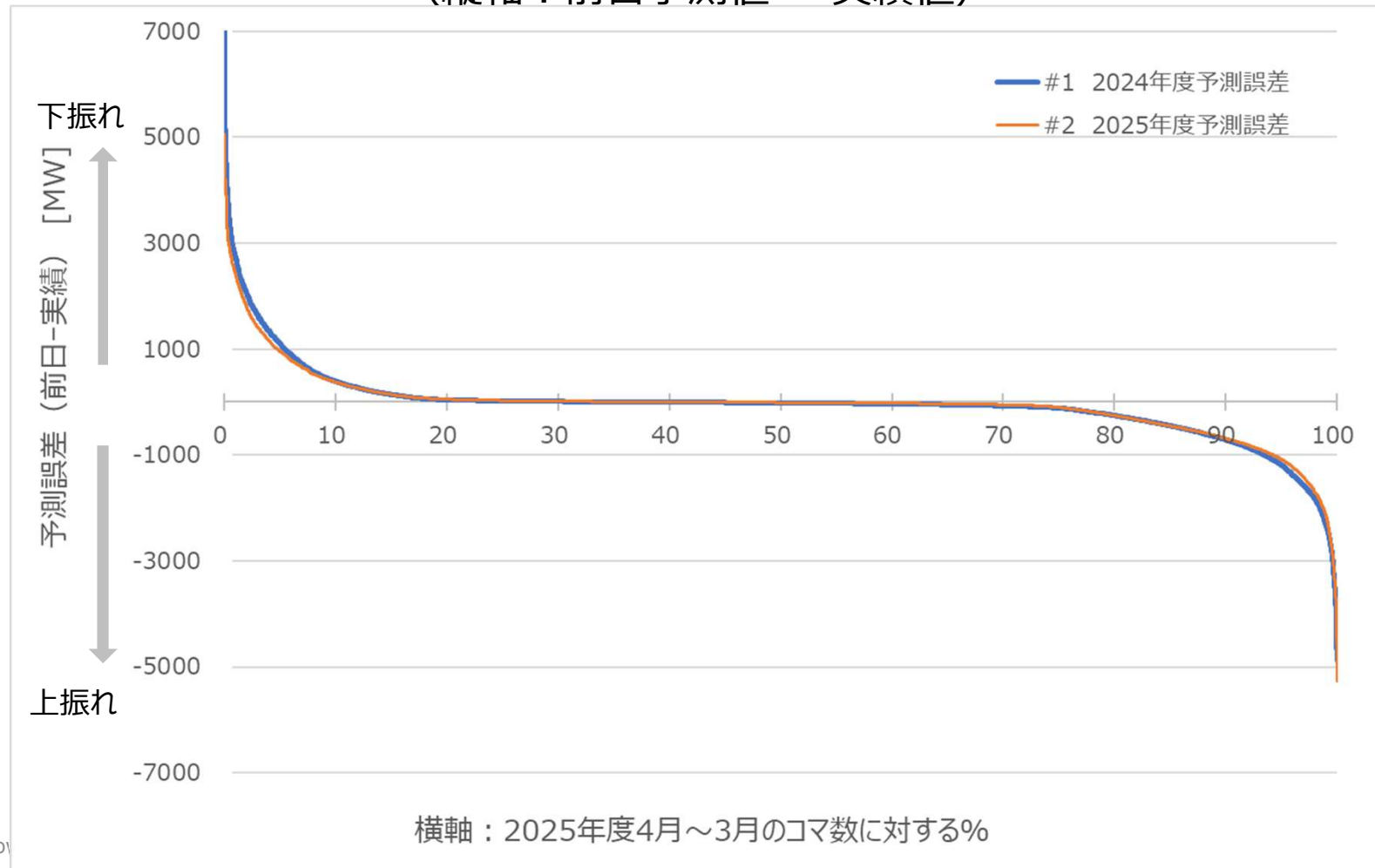


1-6. 再エネ予測精度の前年度との比較

- 前日予測から実績値との差を用いて、2024年度※と2025年度の再エネ予測精度を比較した結果、気象モデルの高度化により不足量、余剰量ともに減少しており、予測精度の向上が確認できた。

※FIT設備量の変化にも影響を受けることから、設備増加率にて補正

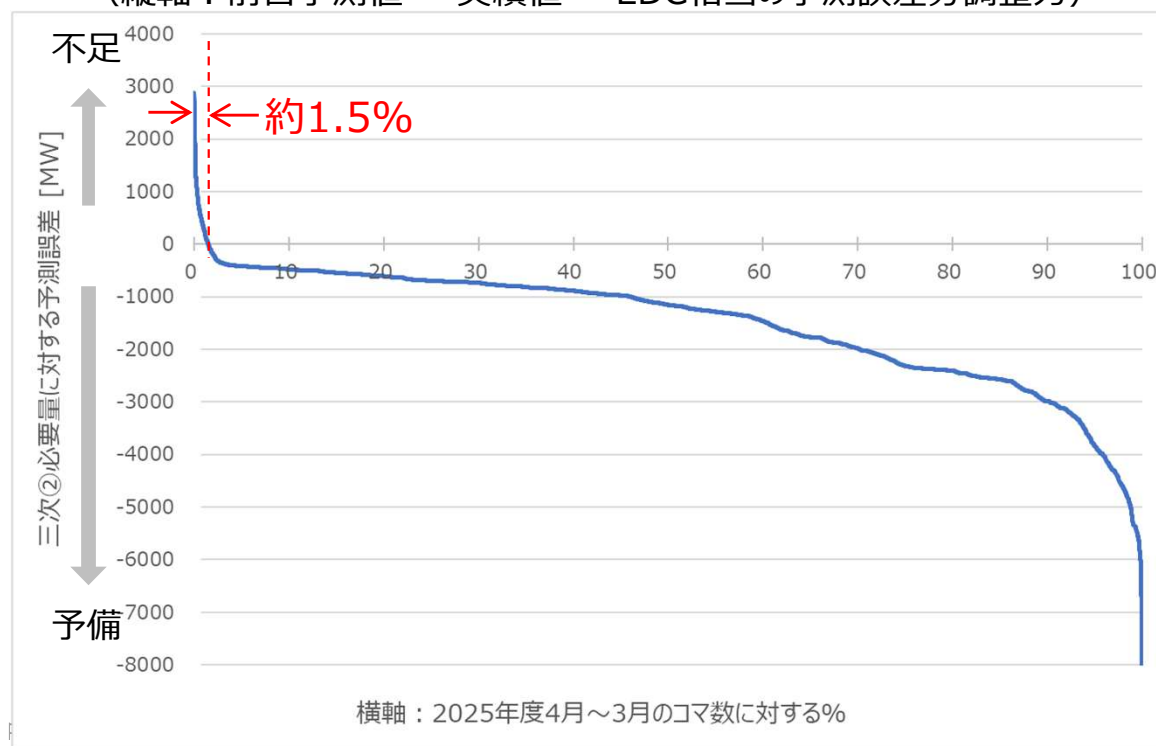
実績に対する前日予測値のデュレーションカーブ (縦軸：前日予測値 - 実績値)



2-1. 実需給における再エネ予測誤差対応

- 前述のとおり、2025年度における予測誤差（前日予測値－GC予測値）と三次②必要量を比較したところ、約15.0%の不足が発生していたものの、再エネ予測外しによる大幅な周波数低下等の事象は発生していない。
- これは、実需給断面では、三次②に加えて二次②・三次①相当の調整力を用いて、再エネ予測誤差に対応しているためと考えられる。
- このため、実需給断面における“再エネ予測誤差”と“事前に確保した調整力”を比較した結果、約98.5%のコマで実績の誤差に対応できていたことを確認。
- 一方、残り約1.5%は余力活用電源の余力に頼る運用となっていた。

『EDC相当の予測誤差分調整力』に対する『実需給における予測誤差(前日予測値－実績値)』のデレーションカーブ
(縦軸：前日予測値－実績値－EDC相当の予測誤差分調整力)

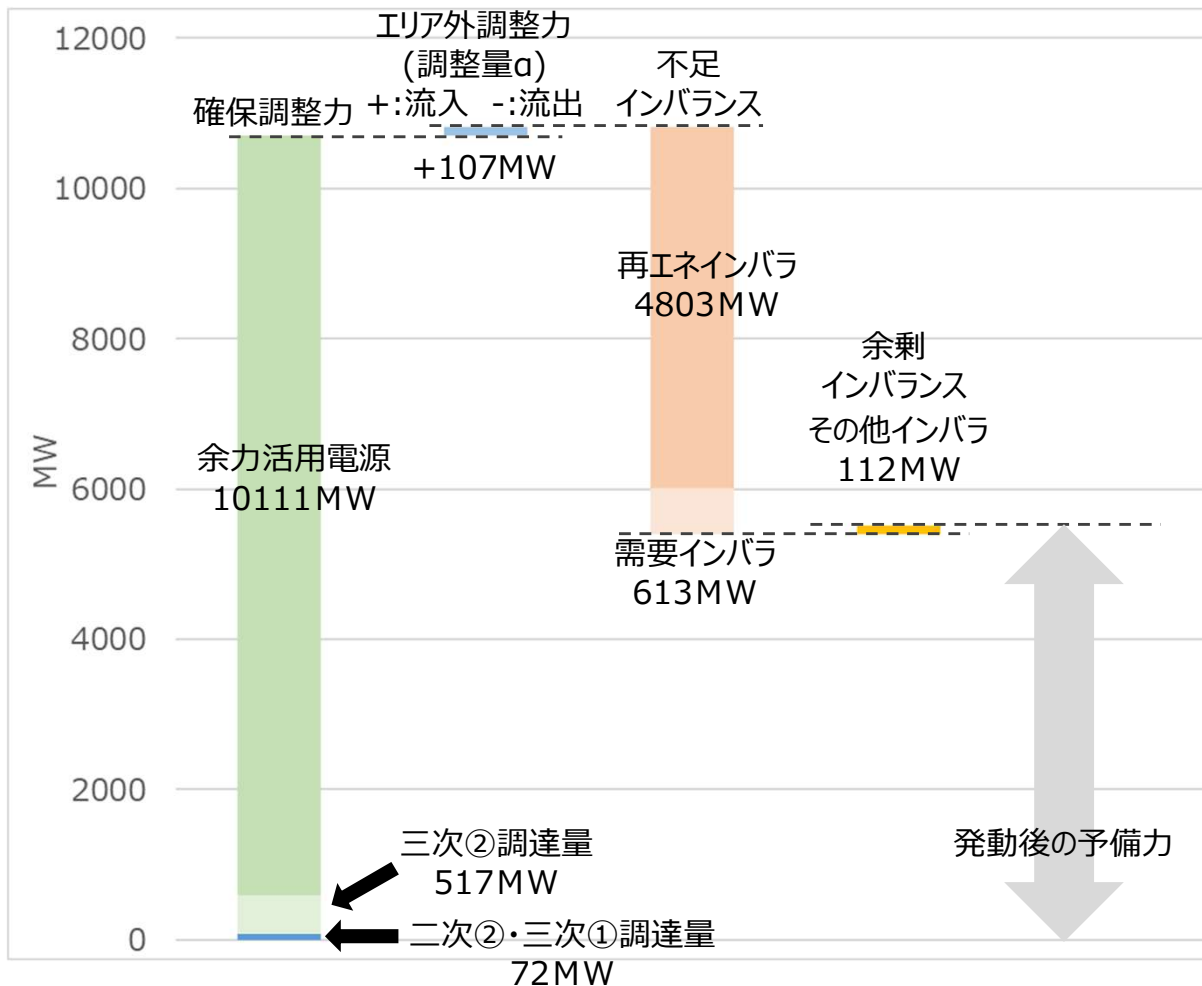


2-2. 不足した断面での実需給の運用状況

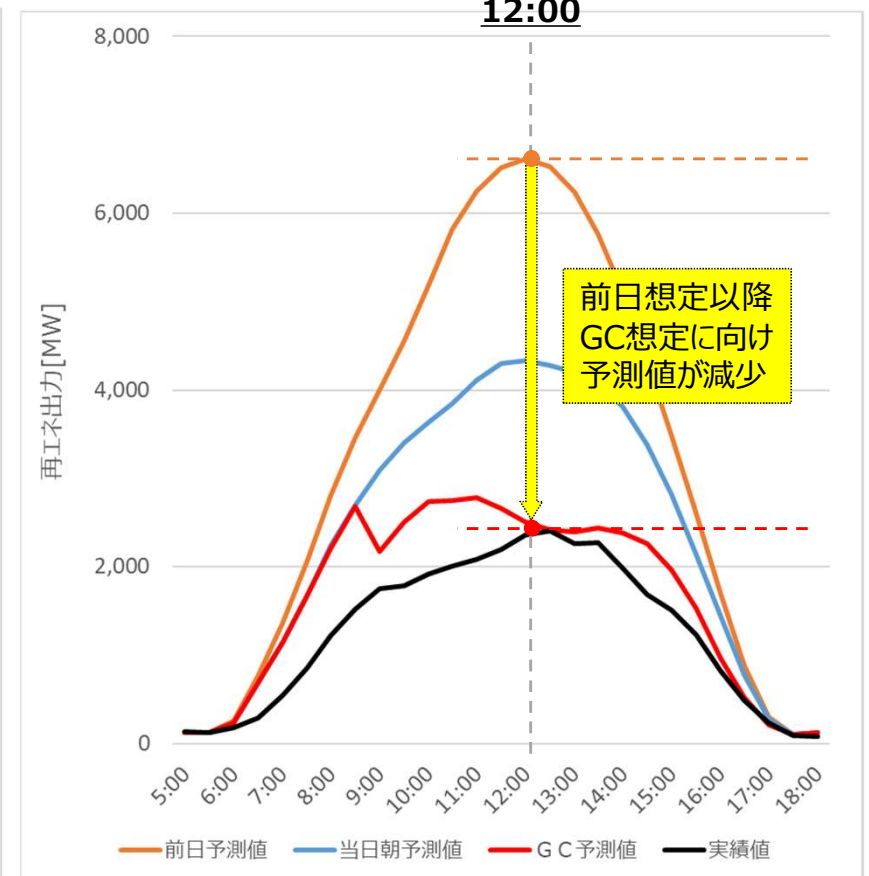
- 2025年度4月～3月で三次②不足量(前日予測値-GC予測値)-三次②必要量)が最大の断面について、実運用の状況を確認したところ、需要ならびに再エネインバランスに対して、三次②、二次②・三次①や余力活用電源および広域需給調整による調整力で対応できていた。

2026/03/20の状況(不足量3330MW)

三次②不足量が最大の断面(12:00)



再エネ予測値と実績値



【参考】三次②必要量が不足する断面が生じる要因

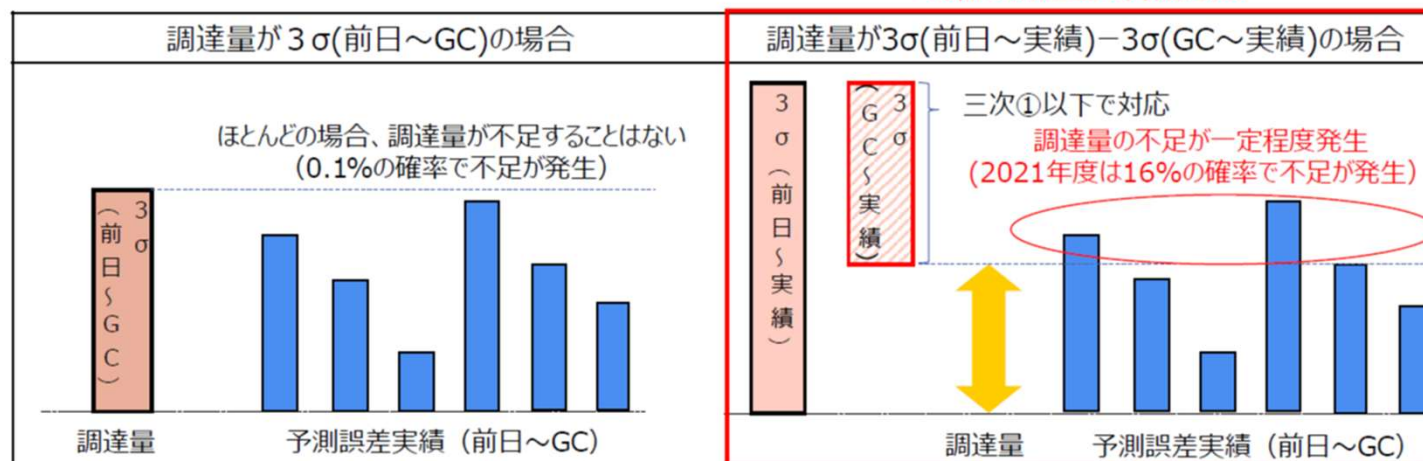
- 三次②必要量は「前日から実績値の予測誤差の 3σ 」－「GCから実績値の予測誤差の 3σ 」により算定を行っているため、実際に生じる前日からGCまでの予測誤差に対しては三次②必要量が不足する断面が一定程度発生することになる。

三次②調達量が不足となるコマの発生について

13

- 三次②必要量は、前日からGC時点までの再エネ予測誤差に確実に対応するために、「前日予測値－GC予測値」の再エネ予測誤差の 3σ 相当値とするところ、GC以降の調整力（現時点では電源Ⅰおよび電源Ⅱ余力）が適切に確保されていれば、前日から実需給の再エネ予測誤差の全ての量に対応できることを前提に、現在の三次②必要量は、「前日から実績値の予測誤差の 3σ 」－「GCから実績値の予測誤差の 3σ 」で算出している。
- そのため、安定供給面の評価として、GC時点までの再エネ予測誤差に対して、三次②調達量が不足している断面において、GC以降の調整力余力も踏まえた再エネ予測誤差への対応状況を確認することとした。

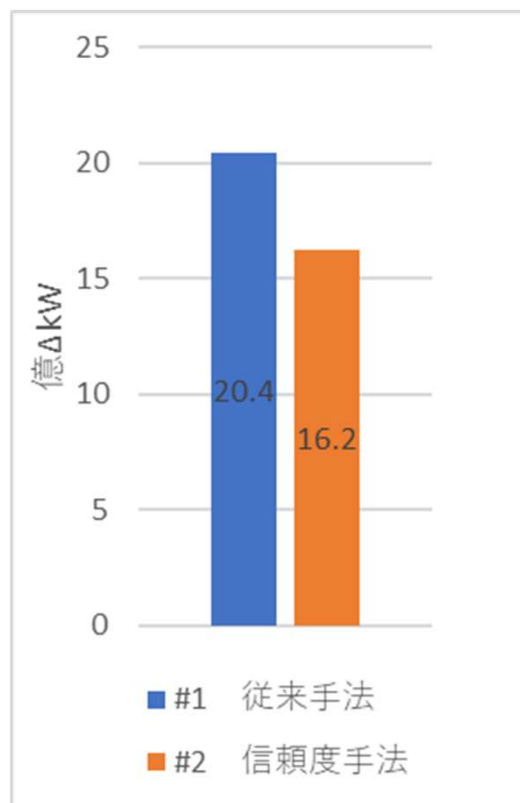
現在の調達量の算定方法



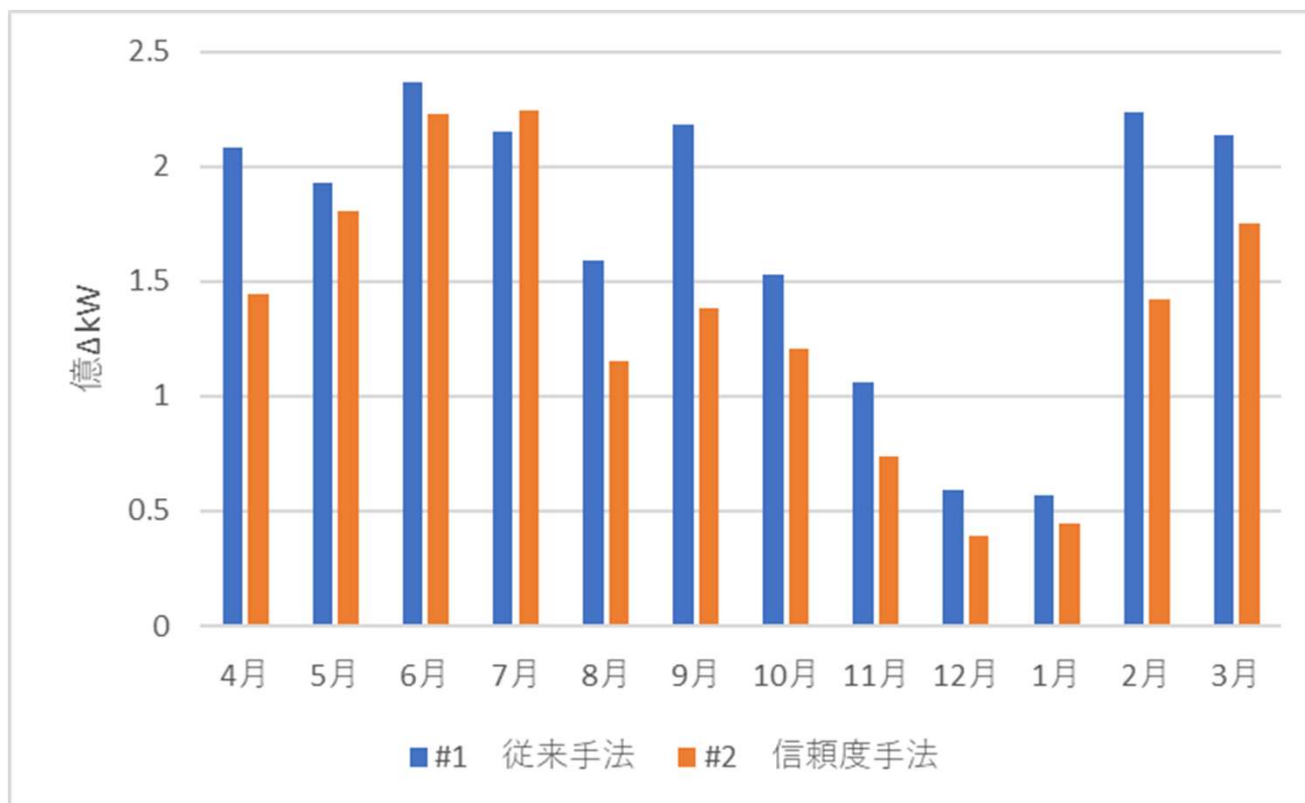
3-1. 信頼度予測による必要量比較

- 第30回需給調整市場検討小委にて整理された気象予測の信頼度に応じた必要量の算定手法について、評価を実施。
- 信頼度予測手法を導入していない場合と比較した結果、累計約21%の必要量低減効果があったことを確認した。

三次②必要量（累計）



三次②必要量（月別）



3-2.信頼度予測による運用の確認

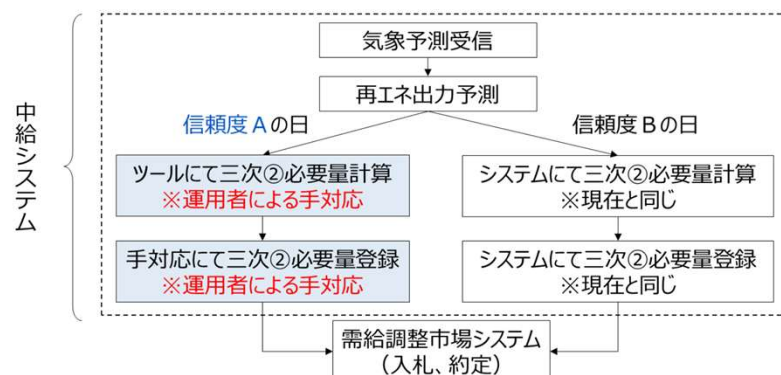
- 信頼度予測の運用においては、気象会社からの予測信頼度に基づいて、適切にテーブルを選択し、募集を行う必要がある。
- 今後自動的にテーブル選択するシステムを導入することが望ましいが、本システムが導入されるまでの間は、手動にてテーブルの選択を行うこととなる。
- そのため、適切なテーブル選択が実施できていたか確認を行い、2025年度4月～3月分については気象会社からの予測信頼度に応じたテーブル選択を確実に実施できていた。

今回手法を利用した場合の運用方法について

25

- 今回手法導入後、三次②必要量テーブルの公表については、従来のBテーブルに加えてAテーブルも新たに公表することとしてはどうか。
- また、Aテーブルの妥当性について検証を行ったが、今回手法導入後の需給調整市場での三次②募集にあたっては、契約している気象会社から入手した予測信頼度に基づいて、適切にテーブルを選択し、募集をする必要がある。
- 中部電力PGにおいては、気象会社からの予測信頼度に基づき、自動的にテーブル選択するシステムを導入する予定となっている一方、このシステムが導入されるまでの間は、手動にてテーブルの選択を行うこととなるため、適切なテーブルを選択しているかどうかは、事後検証において広域機関が確認することとしてはどうか。

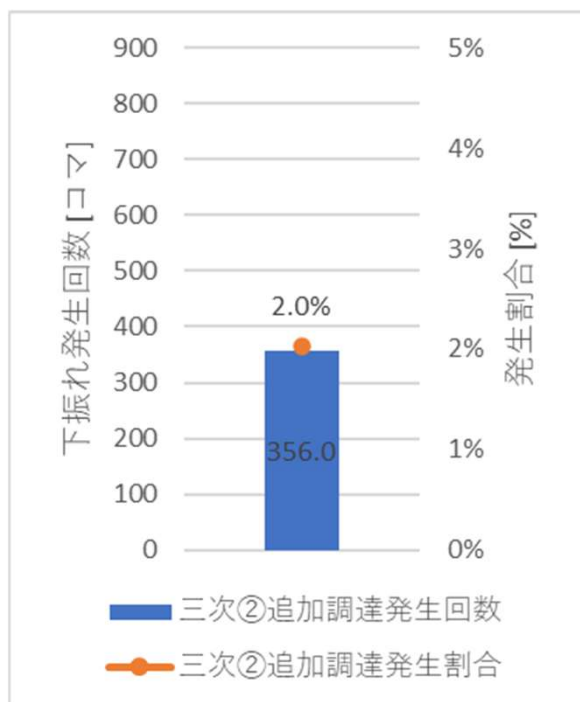
(参考) 中部電力PGにおける三次②必要量算定フロー



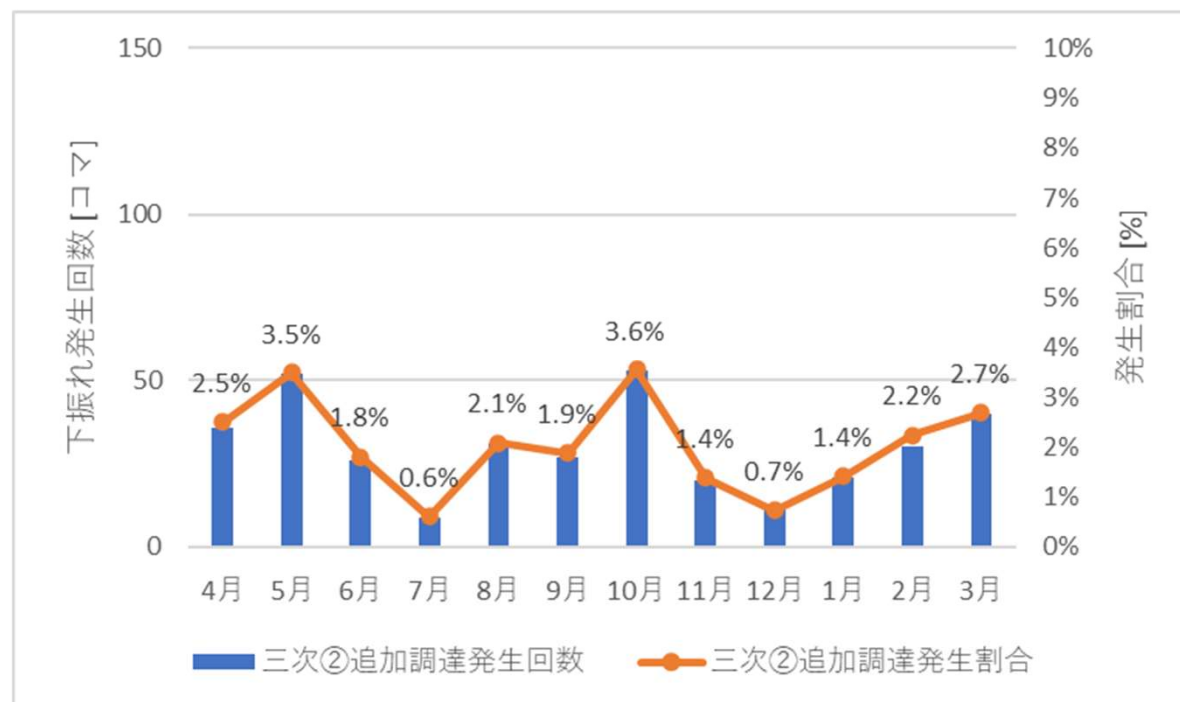
4-1. 効率的な調達(1σ)における追加調達対応

- 第48回需給調整市場検討小委にて整理された、三次調整力②の効率的な調達が2024年度より導入され、前日市場での必要量を3σ→1σ相当値に削減することとした。
- これに伴い、前日15時時点の再エネ予測値について、追加調達閾値以上の下振れが発生した場合、再エネ下振れ量を加味して3σ必要量相当を追加調達する運用を実施している。
- 2025年度4月から3月の期間において、追加調達を実施したコマは実施期間中2.0%であった。(17520コマ中356コマ)

**三次②追加調達発生回数
(累計)**



**三次②追加調達発生回数
(各月)**



【参考】効率的な調達に伴う追加調達について

- 前日市場での必要量を3σ→1σ相当値とすることで、不要な断面の必要量を削減する取り組みであり、必要と判断する断面のみ追加調達を実施して3σ相当値を確保する。
- 取り組み対象としては、全ブロック（48コマ）を対象としている。

三次②の効率的な調達について 15

■ 一方で、本質的に不要な断面の調整力（必要量）は削減することが望ましく、前回の本小委員会でもお示したとおり、既に検討が進んでおり、三次②募集量見直しにおける案A-c（募集量を3σ→1σ相当に削減）に該当する三次②の効率的な調達の取り組みを進めていくことも重要になると考えられる。

【案A-c：募集量を3σ→1σ相当に削減（三次②の効率的な調達）】

調整力必要量は、過去実績の3σ相当値

需給調整市場で1σ相当値を調達

追加調達判断

追加調達不要 (年間の約84%)

追加調達必要 (年間の約16%)

必要と判断する断面のみ追加調達し、計3σ相当値確保

調整力必要量の実績イメージ

最大値相当の調整力が必要となる断面は存在

3σ相当確保することで余剰となる部分

調整力が必要となる事象のうち約84.14%程度をカバー

約99.87%程度をカバー

(参考) 対象ブロックについて 33

- 第43回本小委員会において、三次②の効率的な調達の対象ブロックについては、時間前市場における追加調達の実務負担、ならびに必要量削減効果の観点等から、「平日の3～6ブロック※」に限定することとした。
- この点、現在の三次②応札不足の状況、および追加調達を余力活用で対応する場合、時間前市場の買い入札対応と比較して実務負担が大きい点等を踏まえ、三次②の効率的な調達（追加調達は余力活用対応）においては「全ブロック」を三次②の効率的な調達の対象としてはどうか。

※ 第43回本小委員会では、「平日の3～6ブロック」以外には効率的な調達を実施せず、常に3σ相当値を調達することとした。

効率的な調達の対象ブロックについて 28

- また、第36回本小委員会（2023年3月2日）において、三次②余剰分の時間前市場売入札（領域a）対象コマは、勤務時間や省力化の観点を踏まえ、効果が高い、平日対応可能な日の3～6Bに限定することとした。
- 追加調達（買い入札）に関しても、効率的な調達を導入することによる効果（必要量削減）は3～6Bが大宗であることを踏まえ、人間系での対応となる導入当初においては、**効率的な調達の対象ブロックについて平日対応可能な日の3～6Bに限定することとしてはどうか**。
- この点、将来的なあるべき姿として、引き続き、全ブロックを対象とする方向でシステム化等の検討を継続したい。

※ 対象以外のブロック（1-2・7-8B）については、効率的な調達の対象とせず、現行同様に前日必要量を3σ相当値として調達する。

【効率的な調達導入による必要量の削減割合（全エリア合計）】

コマ	1B	2B	3B	4B	5B	6B	7B	8B
全体削減量に対する割合	0%	2%	21%	21%	23%	31%	2%	0%

3～6Bで全体の96%

出所) 第43回需給調整市場検討小委員会（2023年11月9日）資料2をもとに作成
https://www.occto.or.jp/iinkai/chouseiryoku/jukyuchousei/2023/2023_jukyuchousei_43_haifu.html

出所) 第48回需給調整市場検討小委員会（2024.6.26）資料2

https://www.occto.or.jp/iinkai/chouseiryoku/jukyuchousei/2024/files/jukyushijyo_48_02.pdf

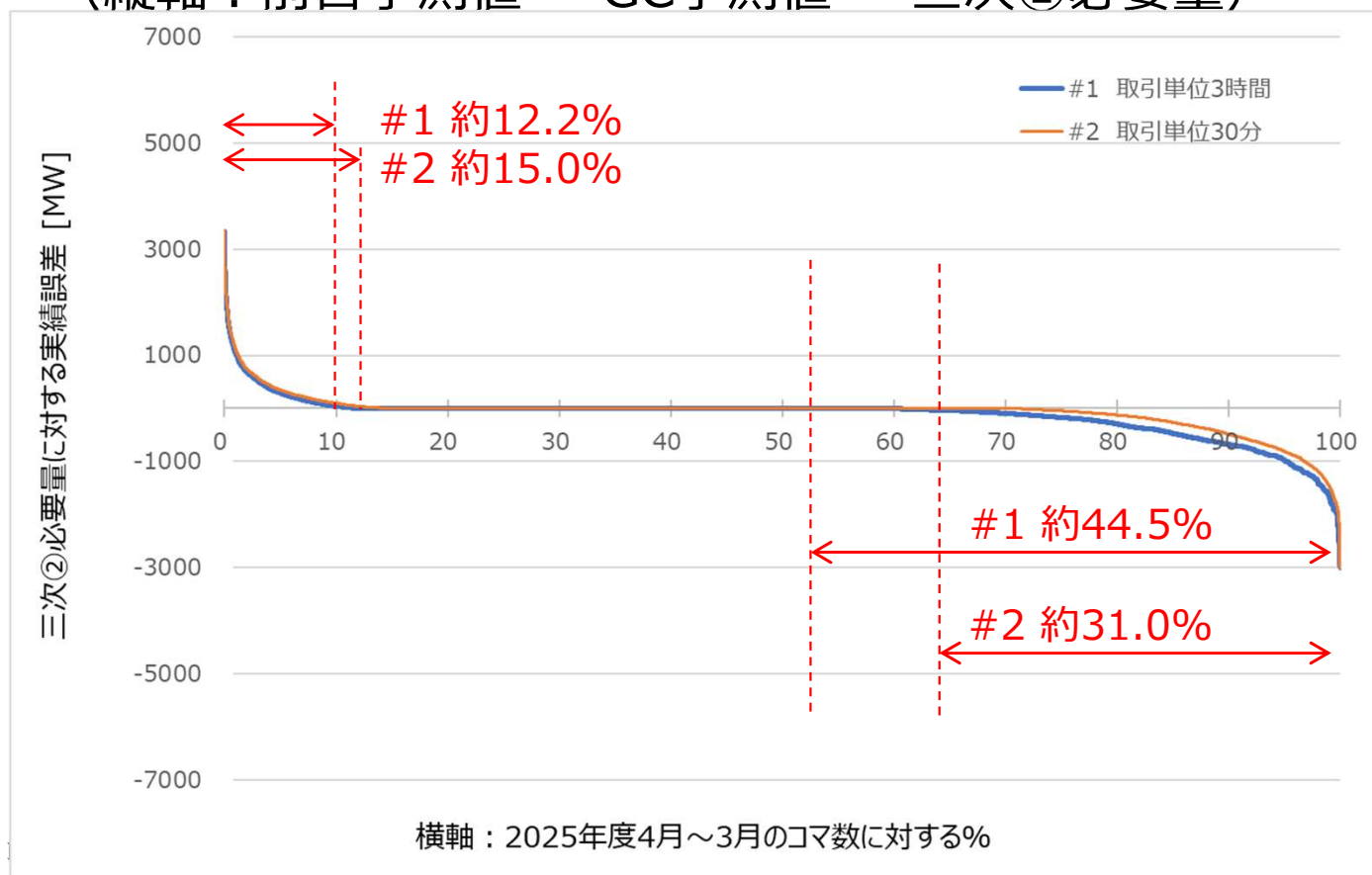


5-1. 三次調整力②の取引単位30分化

- 第25回需給調整市場検討小委にて整理された、三次調整力②の取引単位30分化が2025年3月14日より導入された。
- これに伴い、2025年度4月～3月での三次調整力②の必要量について評価した。
- 不足コマは約2.8%増えたが予備コマが約13.5%減少し、必要量の低減効果のほうが有意に出た。

三次②必要量に対する予測誤差のデュレーションカーブ

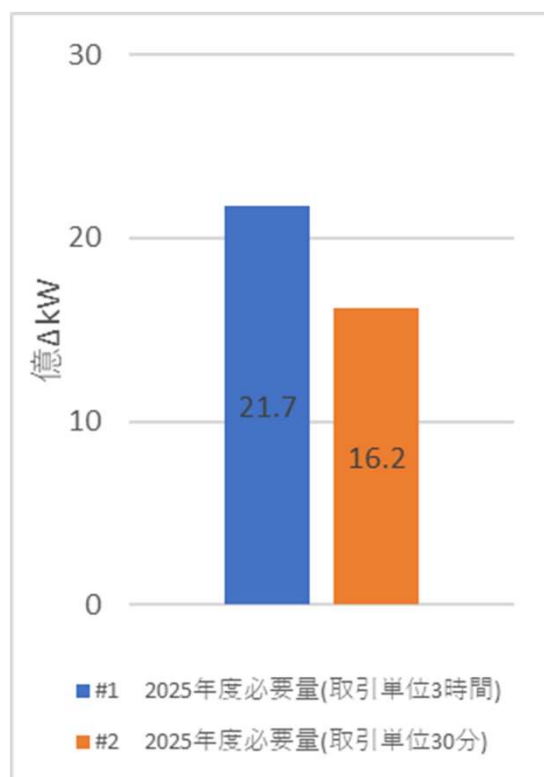
(縦軸：前日予測値 - GC予測値 - 三次②必要量)



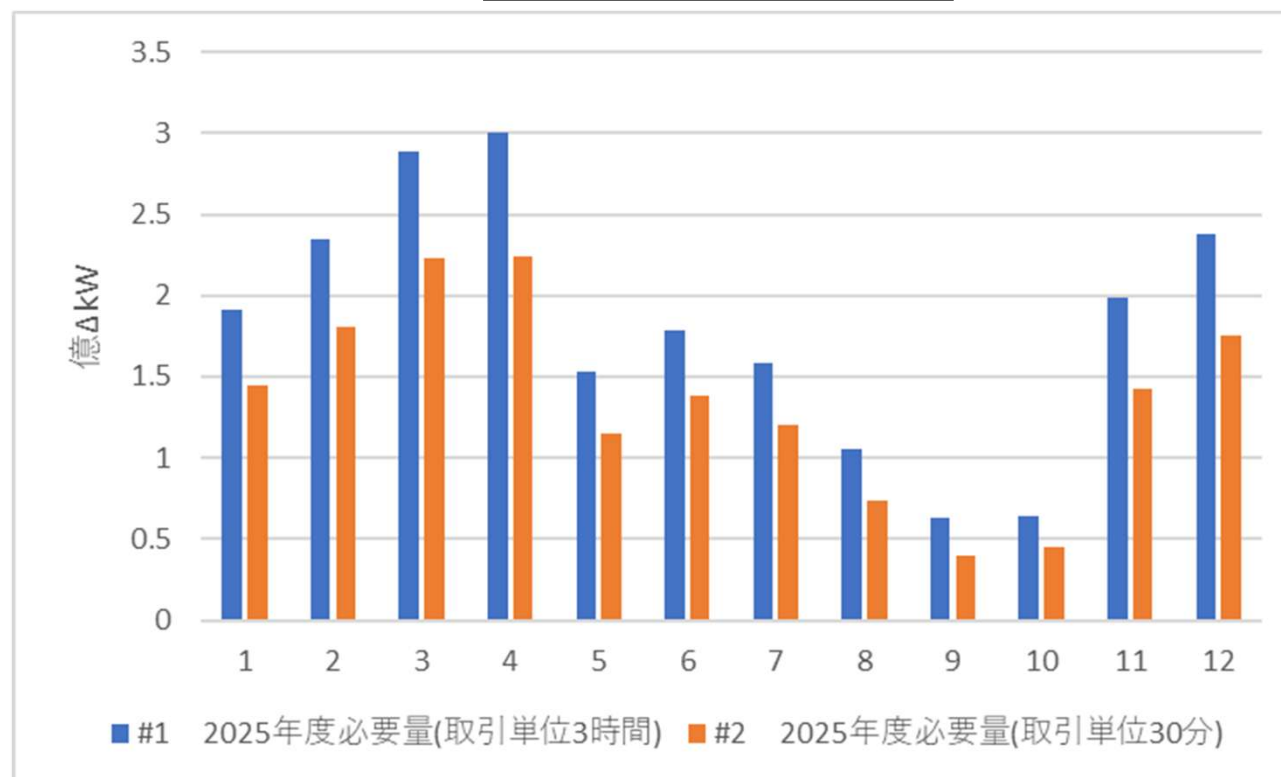
5-2. 三次調整力②の取引単位30分化

- 2025年度4月～3月での三次調整力②の必要量について取引単位3時間と30分で比較を実施した。
- 取引単位30分化により累計で約25.3%の必要量削減効果があった。

三次②必要量（累計）



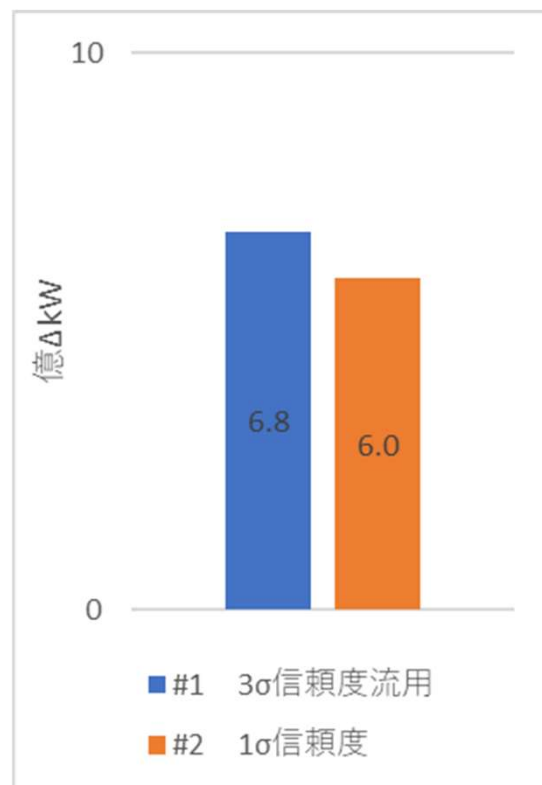
三次②必要量（月別）



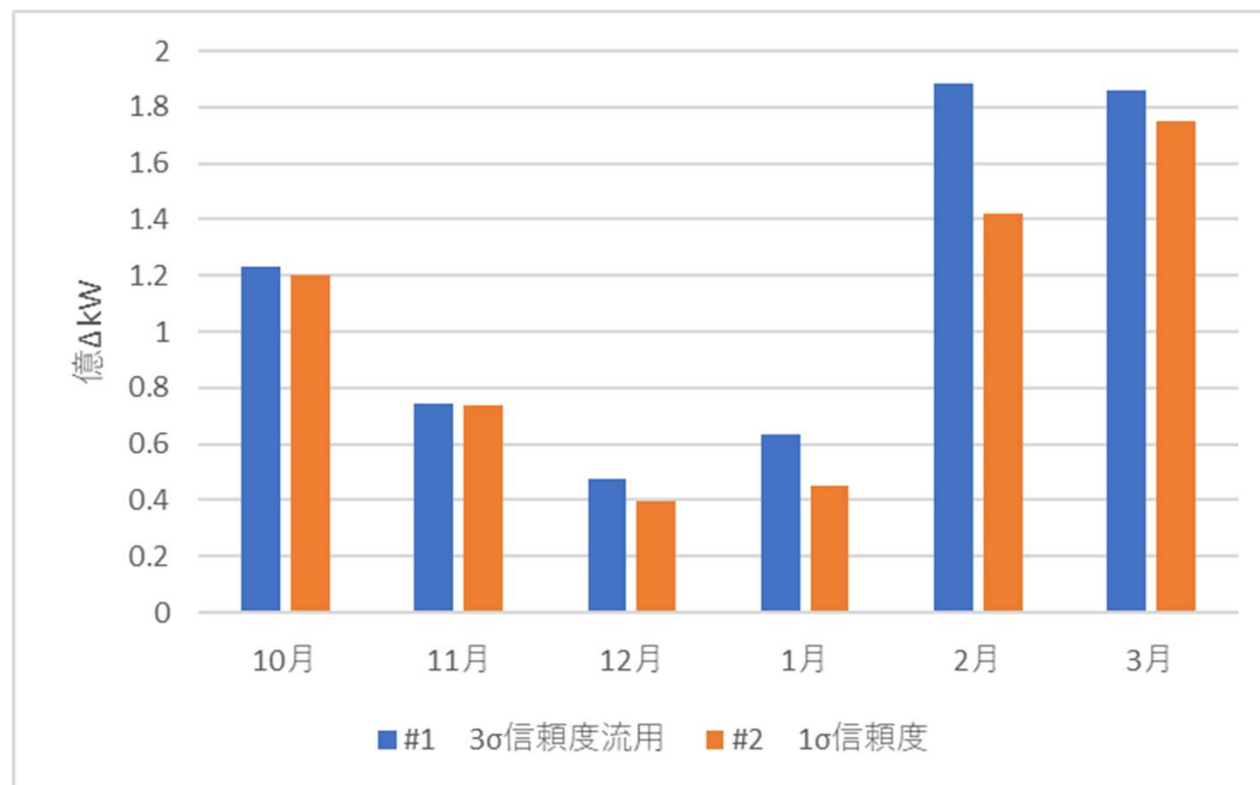
6. 1σ信頼度ランク情報の導入

- 従来は3σ信頼度ランク情報を流用して1σ信頼度ランクテーブルを作成していたが2025年10月より1σ信頼度ランク情報を導入した。
- 1σ信頼度ランク情報の導入による効果を検証した。
- 10月～3月で約12.7%の削減効果があった。

三次②必要量（累計）



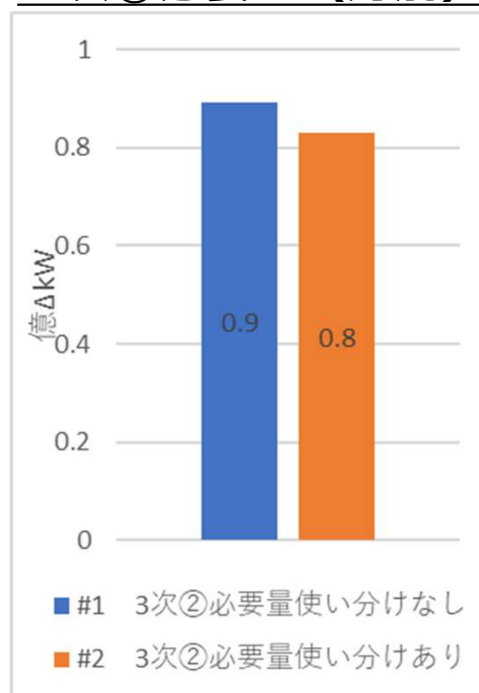
三次②必要量（月別）



7. 三次②必要量の使い分け

- 三次②必要量は、前日～GCまでの再エネ予測誤差に対応しており、複合商品によってGC以降の再エネ予測誤差に対応することから、三次②必要量の算定方法は、全体の再エネ予測誤差である「前日から実需給面の誤差」から「GCから実需給の誤差（複合商品の対応分）」を控除することとしている。
- ここで、本来的には、複合商品の追加調達有無により、控除量を「 1σ （追加調達なし）」or「 3σ （追加調達あり）」として使い分けるのが、複合商品の調達状況と整合した三次②必要量になると考えられる。
- したがって、複合商品の追加調達有無により、控除量を「 1σ 」と「 3σ 」で使い分ける運用を2026年3月14日より開始した。
- 使い分け運用により2026年3月は約7%削減効果があった※1。

三次②必要量（月別）



※1 複合市場前日化の2026年3月14日以降で比較した

8-1. 必要量テーブルの特異値補正による不足量の変化

- 三次②必要量テーブルは、月別・予測出力帯・時間帯別に分類するが、十分なデータが蓄積できていない区分においては特異値が発生するため、テーブル内で隣接する予測誤差発生状況を用いて補正処理を実施している。
- 補正処理による効果を確認するため、三次②必要量テーブルについて補正処理の有/無 毎に必要な量に対する予測誤差を算出し、比較する。

※気象情報の精度向上に向けた取り組みは調整力等委員会で検討中。

再エネ設備導入量の補正

- 過去の予測値および実績値を、当時の設備量に対する取引年度の設備量の比率で引き延ばす補正処理をしてテーブルを作成

【N年前】

(設備導入量)
3,000MW

日時	予測	実績
4/1 00:00~00:30	9	5
4/1 00:30~01:00	25	15
⋮	⋮	⋮
4/1 03:00~03:30	20	10
⋮	⋮	⋮

× 4,000
3,000

【取引年度】

(設備導入量)
4,000MW

日時	予測	実績
4/1 00:00~00:30	12	7
4/1 00:30~01:00	33	20
⋮	⋮	⋮
4/1 03:00~03:30	27	13
⋮	⋮	⋮

テーブル内で隣接する予測誤差を用いた補正

- データ欠損等に対して、上下（予測出力帯）、左右（時間帯）の予測誤差値を平均した値に線形補正

6月	70%1 (0時~3時)	70%2 (3時~6時)	70%3 (6時~9時)	70%4 (9時~12時)	70%5 (12時~15時)	70%6 (15時~18時)	70%7 (18時~21時)	70%8 (21時~24時)
0~10%	0	0	0	0	0	0	0	0
10~20%	0	0	0	188	0	98	0	0
20~30%	0	0	0	0	20	80	0	0
30~40%	0	0	0	1784	2374	320	0	0
40~50%	0	0	1033	1473	1830	683	32	0
50~60%	0	0	45	2316	2220	1081	18	0
60~70%	0	48	301	2133	2476	1803	0	0
70~80%	0	37	1029	3614	332	3371	29	0
80~90%	0	52	1949	4261	5491	1437	33	0
90~100%	0	55	1201	2376	1822	1273	114	0

出所) 第20回需給調整市場検討小委員会 (2020.12.11) 資料3

https://www.occto.or.jp/iinkai/chouseiryoku/jukyuhousei/2020/files/jukyushijyo_20_03.pdf

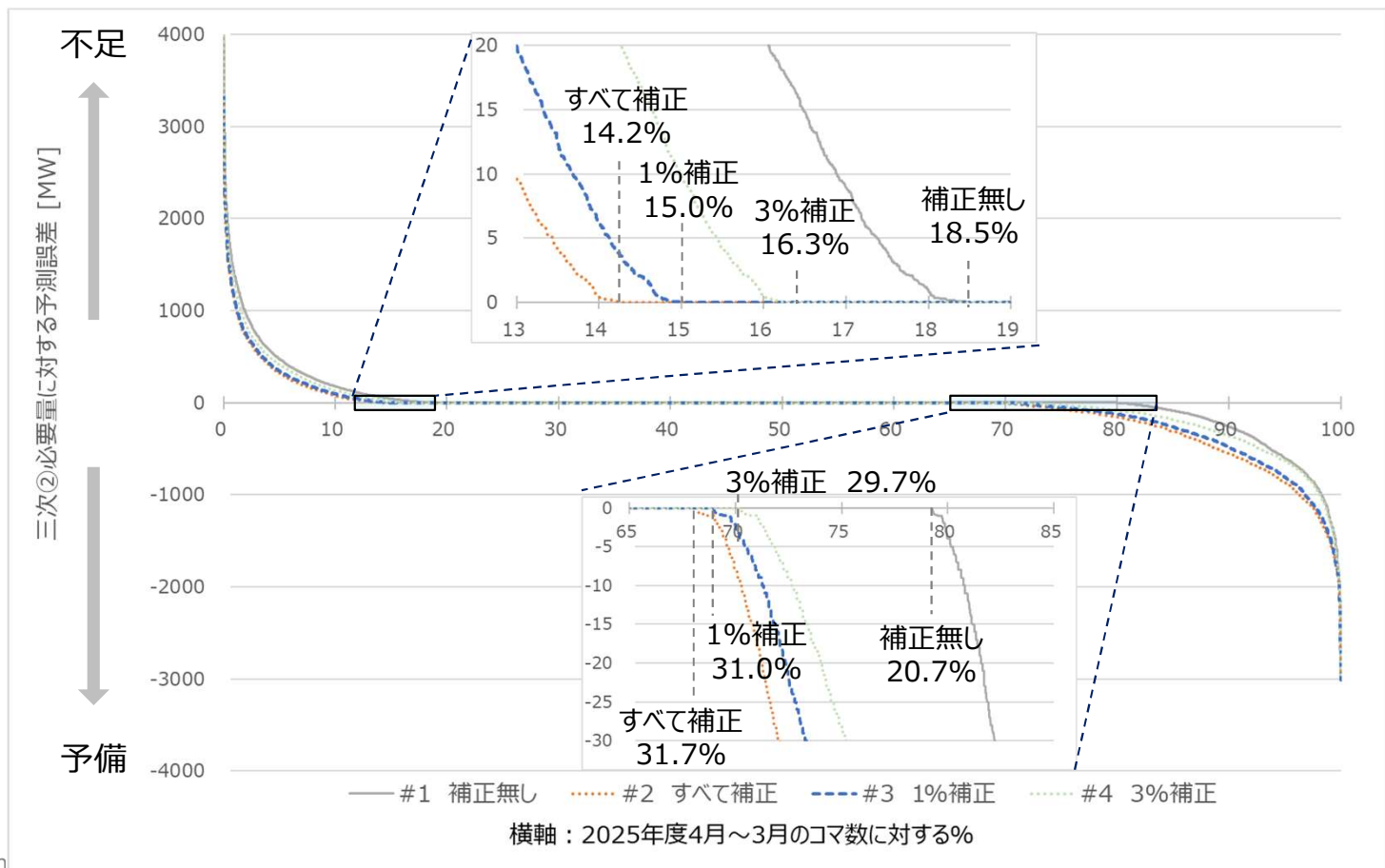


8-2. 特異値を補正する閾値

- 補正処理により、不足側の期間は減少し、予備側の期間は増加している。
- 予備側期間の増加は発生しつつも、不足側期間は減少しており、安定供給の観点から、補正処理は妥当であったと考えられる。
- また、現状は、前後の必要量差が系統規模比1%以上の箇所を補正している。
- “1%補正した場合”と“すべて補正した場合”とを比較すると、不足期間・量は同程度であった。

三次②必要量（各補正）に対する予測誤差のデュレーションカーブ

(縦軸：前日予測値 - GC予測誤差 - 三次②必要量 (補正無し、すべて補正(0%)、補正值1%、補正值3%))



- 2025年度4月～3月の予測誤差（前日予測値－GC予測値）に対して、三次②必要量が不足する断面は存在したが、二次②・三次①や余力活用電源の活用、広域需給調整によって安定供給上は問題なく対応できた。
- また、予測誤差に対して必要量が大きい断面も同様に存在したが、必要な調整力は過去の誤差実績の1 σ 値、再エネの下振れが予見される場合には3 σ 値を採用しており、統計的には発生しうる事象であると考える。
- 引き続き、再エネ予測精度向上等により、必要量の低減および調達精度の向上を図っていく。

